

戦後日本の養護施設のもとにあった子どもの家族語り

——作文・手記を手がかりに——

○野崎祐人（京都大学大学院）

戦後日本における子どもの公的な保護と代替養育をめぐる歴史社会学的研究が丹念に跡づけてきたのは、代替養育の対象のほとんどが戦争によって実親を亡くした戦災孤児であった敗戦後期から「児童虐待」概念が興隆し養育上問題のある家族に対する公的な介入が進展する1990年代にかけて、家庭の養育環境の劣悪さや実親の養育責任を糾弾するような言説が児童福祉の専門家言説のなかで徐々に構成されていく軌跡であった(土屋 2014、上野 1996)。一方で、同時期に公的に保護されて代替養育の場である養護施設のもとに置かれた子どもの側は、どのように家族を語っていたのか。

本報告では、養護施設における子どもの卒業文集(『戦争孤児関係資料集成』[2022]所収)、養護施設職員によって編まれた手記集(積惟勝『われらかく育てり——戦災児童の手記』[1951])、養護施設の全国組織である全国社会福祉協議会養護施設協議会によって収集・編集された作文集(『作文集 泣くものか』[1977]『作文集 続泣くものか』[1990])、施設従事者による研究組織である全国養護問題研究会によって編まれた作文集(『春の歌うたえば』[1992])や機関誌(『そだちあう仲間』『日本の養護』『日本の児童養護』)に掲載された作文等、敗戦後～1990年代にかけて書かれ編まれた養護施設の子どもの作文・手記を手がかりにこの問いを検証する。具体的には、大人/子ども間の語りのずれにも注目しつつ「子ども」の語りの特徴を描いた先行研究(元森 2009)の方法にも学びながら、「大人」の側はいかなる意図・目的のもとで子どもの作文を収集し編集したのか、その条件のもとで養護施設の子どもたちがどのような語彙や規範を用いながら自らの原家族、同時代の家族をめぐる問題、理想の家族を解釈・記述(Gubrium and Holstein 1990=1997)していたのかを跡づける作業を行う。それを通して、養護施設のもとにあった子どもの家族語りは同時代の行政・マスメディア・児童福祉施設の従事者等「大人」の間における家族語りとは微妙なずれをはらみながら成立していたこと、また作文・手記の編集に携わった「大人」は「子ども」の家族語りをしばしば再解釈・上書きしていたことが示される。

近年の社会学において、ケアの受け手や児童福祉制度のユーザーとしての子どもが家族に関する知識や規範をいかに資源として用いながら様々な解釈実践を行っているかをインタビュー調査や参与観察によって解明する試みが多く行われているが(野辺編 2022 など)、本報告は同様の課題に対して歴史的にアプローチする試みでもある。

文献(登場順)

土屋敦, 2014, 『はじき出された子どもたち——社会的養護児童と「家庭」概念の歴史社会学』勁草書房。

上野加代子, 1996, 『児童虐待の社会学』世界思想社。

元森絵里子, 2009, 『「子ども」語りの社会学——近現代日本における教育言説の歴史』勁草書房。

Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein, 1990, *What is Family?*, Mountain View, Calif.: Mayfield. (=1997, 中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳『家族とは何か——その言説と現実』新曜社。)

野辺陽子編, 2022, 『家族変動と子どもの社会学——子どものリアリティ/子どもをめぐるポリティクス』新曜社。

(キーワード: 養護施設、家族語り、作文・手記)